



国宝「土偶」(縄文のビーナス)

昭和61年9月9日 米沢 棚畑遺跡出土 平成7年 国宝指定 縄文時代中期(約5,000年前)の土偶で、 棚畑遺跡の第500号土坑で発見された。 新しく生まれる生命や母性の象徴であったと 考えられる。



国宝「土偶」(仮面の女神)

平成12年8月23日 湖東 中ッ原遺跡出土 平成26年 国宝指定 縄文時代後期(約4,000年前)の土偶で、 中ッ原遺跡の第70号土坑で発見された。 「死と甦り」の儀礼をとりおこなう神格化 された存在を表現した像と考えられる。



茅野市の魅力

それは

雄大な自然 八ヶ岳の眺望 明るい空気・・・ そして

その自然に育まれた類稀なる縄文文化

「縄文」の価値を考古学の世界だけにとどめず 私達の生活の中で普遍性を持たせる取組 茅野市の「宝」を磨き 育てる取組

> それが 縄文プロジェクトです

「縄文のみやこ」に生きるものとして



本市の位置する八ヶ岳西南麓地域は、縄文中期には列島でも最も人口の集中 した地域であったとされ、市内にはこの時代を代表する国指定特別史跡「尖石 遺跡」、国指定史跡「上之段遺跡」、「駒形遺跡」など 230 か所以上もの遺跡が発 見されており、「縄文のみやこ」とも言える地域です。

また、棚畑遺跡から出土した「縄文のビーナス」の愛称で呼ばれる土偶は、「縄 文時代の精神文化を考えるうえで傑出した文化遺産」と評価され、平成7年に 日本最古の国宝に指定されました。

さらに中ッ原遺跡から出土した国内最大級の完形の土偶(仮面の女神)は「縄 文時代における土偶造形の頂点に位置付けられる。」と評価され、今年8月 21 日に国宝に指定されました。

全国で国宝「土偶」を複数所蔵しているのは茅野市のみです。この貴重な縄 文の遺産を、まちづくり、ひとづくりに活かすことができて初めて本当の茅野 市の宝になると思っています。

本市では、平成22年3月に縄文プロジェクト構想を策定し、縄文を活かしたまちづくりに取り組んできました。この取組をさらに深め、「縄文文化の精神性」と、「縄文時代の文化遺産」を活かすまちづくりを進めるため、平成25年度から、縄文プロジェクト推進市民会議の皆さんとともに、縄文プロジェクト構想の見直しに取り組んできました。1万年にわたり営まれ、自然と共生し、共に助け合って生きていたと言われている縄文時代、この縄文の文化や精神性は、日本文化の基層をなし、私たちの生活や考え方の中に息づいています。そしてそれは現代社会が抱えている様々な課題の解決の糸口を、未来に向け、与えてくれるものと考えます。

この縄文プロジェクトの取組は、行政も市民の皆さんも普段の生活の中で「縄文」を意識し、まちづくりに活かしていくという幅の広い、奥の深い取組であり、また時間もかかるものだと思っています。

今回の見直しを機に、この縄文プロジェクトの取組をさらに力強く、着実に 進めて参りたいと思います。

平成26年10月

茅野市長 柳平 千代一

縄文による人育ち



茅野市の位置する八ヶ岳西南麓には、国特別史跡「尖石遺跡」、国指定史跡「上之段遺跡」、「駒形遺跡」など 230 か所以上もの縄文時代の遺跡があります。これら縄文時代の集落を支えたものは、八ヶ岳の雄大な山麓の清らかな水や森を始めとする豊かな自然であり、多くの生命を育みました。豊かな自然は縄文人の暮らしを支え、そして人々を育ててきました。この環境は安定した縄文社会を築くと共に、優れた芸術性を醸成する場ともなり、国宝「土偶」(縄文のビーナス)や国宝「土偶」(仮面の女神)の原始芸術の最高峰とも称される造形物が造られ、そこに現代の私たちは縄文人の息吹や、生きざまを感じることができます。

このような縄文時代の舞台に生きる私たちは、まず、私たちの足元に広がる歴史の環境を識り、その環境を感じることが必要です。そして、縄文のもつ日本の基層とも言える自然との共生や、その精神性、縄文人の知恵や工夫を学ぶことにより、現代人が失いつつあるものを取り戻すことができると考えられます。

地域を識り、この地域の宝を学ぶ"市民総学芸員"は縄文を通して、縄文への理解を高めるだけではなく、物事に興味・関心・意欲を高めると共に、私たちの郷土を愛し、誇りに思う人を育てていくことを目指しています。

また、昭和5年から困難な社会情勢下尖石遺跡の発掘調査を続け、縄文時代の集落研究に輝かしい業績を残された茅野市名誉市民第1号の宮坂英弌先生の生き方があります。宮坂先生の縄文への情熱、地道に学問に取り組む姿、それを支えた、家族・地域の人々の教育や学問を大切に考える風土なども、今後私たちが学んでいかなくてはなりません。

縄文に学びそれを識り、まちづくり、人育ちに活かしていくという取り組みは、私たちの生きる力を高めると共に、強く・たくましい人育ちの指針となるものです。今後縄文プロジェクトを更に推進し、縄文による人育ちに活かして参りたいと思います。

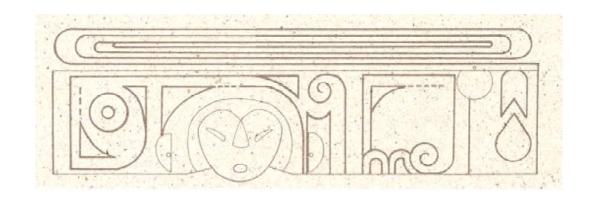
平成26年10月

茅野市教育長 牛山 英彥

目 次

—今、なぜ、「縄文」か — 1
第1編 構想
第1章 茅野市民プランと縄文プロジェクト3
第2章 縄文プロジェクトの背景4
第1節 人類社会の目指すべき方向4
第2節 世界が注目する日本の縄文文化5
第3章 茅野市の縄文文化の素晴らしさ6
第1節 縄文中期文化の繁栄地6
第2節 縄文文化を育てた豊かな自然7
第3節 縄文遺跡の宝庫9
第4節 縄文文化の象徴と考古学者の名誉市民 10
第5節 縄文文化から根付いた茅野市のアイデンティティー 12
第4章 「縄文」の価値をいかしたまちづくりの戦略
─「縄文」が輝かせる3つの柱─14
第1節 「縄文」の価値
第2節 「縄文」の価値をいかしたまちづくりの方針 16
第3節 ひとが輝く「縄文」
第4節 みどりが輝く「縄文」
第5節 まちが輝く「縄文」

第2編 推	É進計画
第1節	推進計画のめざす姿193つの柱と5つの視点19
縄文プロ	コジェクト 体系図
第2章 市	市民総参加による「縄文」のまちづくり
	—構想を力強く推進するための取組— ····· 21
第1節	「縄文」を識る
第2節	「縄文」を広める
第3節	「縄文」から産み出す
第4節	「縄文」を楽しむ
第5節	「縄文」を守る
第6節	5 つの視点全てに関連する新たな取組 29
第3章 絲	単文プロジェクトの展開のために 30
第1節	新たな取組の展開 30
第2節	(仮称) 縄文プロジェクト実行市民会議 30
第3節	展開にあたって
— 「縄	文物語」— … 32
資料編	
	縄文時代Q&A
	茅野市縄文プロジェクト推進市民会議委員名簿 39
	縄文プロジェクト推進市民会議の開催経過41



縄文プロジェクト

優れた縄文の文化・精神を取り入れ、活かし、継承するまちづくり -

一今、なぜ、「縄文」か一

私たちはそれぞれ、永遠とも思える長い時間の流れの中で、今、ここに生を受け、そして生きています。個としての存在は孤独であるようにも思え、また生命の連鎖のなかで過去からずっとつながっているようにも思えます。いったい私たちは、どこから来て、そしてどこへ向かおうとしているのでしょうか。

-今、なぜ、「縄文」か一、「縄文」とは何かを問う時、その問いの根底には常に、私たちはいったい何者なのかという想いが横たわっているように感じます。

私たちの生活様式、考え方など日本文化と呼べるものは、縄文文化を基層としていると言われています。定住が始まることで生活に革命的な変化が起こり、文化を生み出したと言われています。日本列島の豊かな自然風土の中で約1万年にわたり続いた平和な年月は、大陸文明とは異なる日本独自の文化を発展させてきました。

今、私たちは現代文明の行き詰まりの中で個人的、社会的な様々な課題を 抱えていますが、縄文文化には、縄文人の生き方を通じて、現代社会が抱え る様々な課題の解決につながるための価値が確かにあります。

例えば、ここに土器のかけらがあります。この土器は、縄文人が粘土を手でこね、火で焼いて作り上げ、そして日々の暮らしの中で食べ物を煮炊きした生活の道具です。縄文人の生活の証がそこにあります。竪穴住居の中心には炉があり土器が置かれていて、その周りに家族が寄り添って暮らしていま

した。

土器や土偶に込められた縄文人の様々な記憶、日々の暮らしを重ねる中で生まれた喜びや悲しみなどの感情は、現代の私たちと少しも変わりなく、縄文人とDNAでつながっているように感じます。

私たちは、縄文人の生き方、その精神性に触れるとき、そこに今を見つめ 直し、未来を照らす大切な価値を見つけます。

約1万年にわたり続いた定住生活が可能にした支え合いや助け合いの生き 方は、「友愛の心」を象徴していると言えます。

食料にする木の実や住居の材に使用する林などを大切にし、自然を必要以上に壊さないという生き方は、自然と共生し「足るを知る心」を象徴していると言えます。

より豊かな生活を求めて交易を行い、東北や北海道まで黒曜石を運ぶなどの情報交換能力やフロンティア精神は、「たくましさ」、「冒険心」を象徴していると言えます。

草を縄にする、土を器にする、黒曜石を矢じりや刃物にするなど、そこにある資源を上手に活用する知恵と工夫の生き方は、「創造の精神」を象徴していると言えます。

私たちが、まちづくりを考える上で、こうした縄文文化の精神性を学ぶことは、非常に大きな意味があると思います。人も自然も元気で豊かな社会をつくる大きな力になり得ると考えるからです。

茅野市には、全国でも類稀(たぐいまれ)な縄文の文化遺産が多数存在しています。この文化遺産を地域の資源としてまちづくりに活かすこと、そして縄文人の生き方の中に現代人の生き方や、現代社会が抱えている課題を解決する糸口を求めいくことが縄文プロジェクトの目的です。

私たちには、帰るところがあります。世界に誇る縄文文化と、それを育んだ八ヶ岳の豊かな自然に学ぶことにより、心の豊かさや精神性を紡ぎだし、物質的な満足を実感できる社会の実現に向け、縄文をいかしたまちづくりを進めていきます。

第1編 構想

第1章 茅野市民プランと縄文プロジェクト

茅野市民プラン(第4次茅野市総合計画)では、茅野市の目指す将来像を、「人も自然も元気で豊か躍動する高原都市」と定めています。この将来像実現のため、「市民力(自助)、地域力(共助)、行政力(公助)」の3つの力を高め、市民総参加による「みんなでつくるみんなの茅野市」を進めています。

茅野市の将来像の「人も自然も元気で豊か」の原型は、八ヶ岳の豊かな自然に支えられ、今から約5,000年前から4,000年前の縄文時代中期に最も繁栄した縄文文化にあるといえます。私たちの先人であるこの地の縄文人は、国宝土偶や特別史跡尖石遺跡に象徴される精神性の高い文化を育み、共に助け合って元気に暮らしました。また、黒曜石の交易を通して人、情報、文化が行き交う広域交流圏と生活の基盤としての地域社会を営んでいたと考えられます。

今、私たちは市民総参加のまちづくりを進めるに当たり茅野市が世界に誇る縄文文化からそのあり方を学び、後世にこの遺産を伝え、残していかなく てはなりません。

この縄文プロジェクトは、「縄文」の価値を考古学の世界だけにとどめず、 私たちの生活の中で普遍性を持たせる取組、茅野市の「宝」を磨き、育てる 取組です。

第2章 縄文プロジェクトの背景

第1節 人類社会の目指すべき方向

世界の歴史を眺めると、日本が縄文時代の頃、すでに多くの地域で農耕と牧畜の社会から文明の時代へとその歩みを進め始めていました。ヨーロッパ文明も中国文明も大陸を基盤としていることから、自然と対峙し克服しようとする文明でした。特に、ヨーロッパ文明は排他的な要素を持ち、自然を破壊しながら世界的規模で拡大してきました。

特に、現代世界ではヨーロッパ文明の影響が大きく、世界史に大きな影響を与えてきました。

これまで日本文化は、中国文明の影響を受けた一変種という位置付けでしたが、近年では大陸文明とは異なり、自然と共生する中で生み出されてきた歴史的連続性を持った一つの独立の文明であるという考え方を持つ人たちも出てきています。

そして、その日本の文化を生み出した基層となる文化が、縄文時代に成立したと考えられています。

これまで私たち人類の歴史は、物質的な豊かさを実現追求する一方で、自然を破壊し、地球環境の悪化を招いてきました。また、人類は農耕の開始以後、世界各地で富の蓄積や分配を巡り戦争を繰り返してきました。

しかし21世紀に入り、世界は自然破壊、環境汚染、地球温暖化をはじめとする様々な地球環境の危機や戦争などの問題に直面し、人類の未来へ向けての持続可能性と繁栄のため、これまで築き上げてきた文明や現代文化の歪みを見直そうとしています。

そうした人類の存続や地球環境に対する世界の危機意識は、自然保護や 失った自然の回復、そして自然との共生を模索する動きとして様々な分野 に広がりをみせ、人類社会の目指すべき方向として、次第に世界の潮流に なりつつあります。

近年、人と自然との共生をキーワードとして縄文文化の見直しが進んでいますが、日本人の文化の原点と言えるそうした縄文人の社会のありようは、人類社会の目指すべき方向として道標となるものです。

第2節 世界が注目する日本の縄文文化

縄文文化は約1万3,000年前から2,300年前まで、約1万年に わたり日本列島で営まれた文化です。自然の生態系の中で共生、調和し、 定住生活を基盤に狩猟・採集による食料獲得を主な生業とし、高い文化を 形成しました。平和な社会を長期にわたって維持し続けた文化は世界でも 稀であるといわれています。

今、世界では、これからの人類社会の目指すべき方向を模索しています。 特に、ヨーロッパを中心として、世界が縄文文化に注目しはじめたのは、 人類繁栄の危機的状況下で、日本列島という東アジアのフロンティアに位 置する小さな島国において、様々な文化的融合を重ね、自然と共生して長 きにわたって栄えた、縄文文化の精神的、文化的豊かさに、人類社会がこれから目指すべき方向を重ねているからではないでしょうか。

こうした縄文文化の精神的豊かさは、土偶などの宗教的遺物をとおして知ることができます。例えば、土偶には、自然や人間社会の豊かさを祈る縄文人の心のあり様をみることができます。また、道具の再利用、道具にみられる儀礼の痕跡、さらには使命の終わった道具をあの世に「送り、再生を願う」行為などに、現代の使い捨て思想とは異なる、縄文人の高い精神性がうかがわれます。

縄文文化の文化的豊かさは、自然と共生して暮らした縄文人が生活用具に用いた土器や木製品などの多種多様な出土品にみることができます。

第3章 茅野市の縄文文化の素晴らしさ

第1節 縄文中期文化の繁栄地

1 縄文文化の広がりと年代観

縄文文化は、約1万3,000年前から2,300年前まで約1万年にわたって日本列島で、現在の私たちの生活の基層文化をなすものとして営まれました。約1万年という長い時間と、北は北海道から南は沖縄本島、西は対馬、東は八丈島までの地域的な広がりをもつ縄文文化は、その営まれた時期によって文化の盛衰をなし、また地域によって異なった文化を育てながら日本列島の上で重層的に形成されていきました。

本考古学では、この約1万年間続いた縄文時代を、縄文土器の形式的な特徴を基準として、草創期(約1万3,000年~1万年前)、早期(約1万年~6,000年前)、前期(約6,000年~5,000年前)、中期(約5,000年~4,000年前)、後期(約4,000年~3,000年前)、晩期(約3,000年~2,300年前)の6期に区分して縄文時代の歴史を考えてきました。

2 中期文化の繁栄地

この土器編年による6期のなかで、縄文文化が最も成熟したのが中期です。特に長野県を中心とする中部山岳高地には、国宝「土偶」(縄文のビーナス)や芸術的評価の高い縄文土器に象徴される精神性の高い世界観を持った特徴的な文化が繁栄しました。この中部地方は落葉広葉樹林帯が広がり人口がもっとも集中した地域で、なかでもこの八ヶ岳西南麓はその中心地であり、さらにその中央に位置する茅野市には、縄文時代を代表する国指定特別史跡「尖石遺跡」、国指定史跡「上之段遺跡」、「駒形遺跡」など237か所以上もの遺跡が確認されています。また、「土偶」(縄文のビーナス)は、「縄文時代の精神文化を考えるうえで傑出した文化遺産」と評価され、平成7年6月に日本最古の国宝に指定されました。さらに平成12年8月に「中ッ原遺跡」から出土した「土偶」(仮面の女神)は国内最大級の完形の仮面土偶で、その素晴らしい造形美のため、平成26年8月に国宝に指定されました。

第2節 縄文文化を育てた豊かな自然

1 八ヶ岳の美しい景観と山麓の豊かな自然

八ヶ岳は、赤岳(2,899m)を最高峰とする南北約30kmに連なる大火山群です。美しい景観をなす山体は、日本でも屈指の広がりをもつ裾野を形成しています。その西南側の裾野は、南アルプスに連なる山塊との間に開けた美しい空間で、縄文中期の人々の生活の舞台となった土地です。

山麓は西・南向きの斜面のため全体に日当たりが良く、山麓の各所から湧き出る水は清冽で豊富です。豊かな森と清らかでおいしい水は、私たち生きとし生けるものの生命を育み、多様な生きものが関わり合う生態系を形づくりました。この生物多様性は、縄文人の生命と暮らしを支え、日常生活や活動に不可欠なものでした。また、山麓は斜度が小さく、大きな起伏の少ない地形は縄文人の日常生活を助けました。海抜800から1,00mの間に広がる山麓は、暖温帯と冷温帯の落葉広葉樹林が混交する、コナラ・クリ・ミズナラなどの堅果類をはじめ、人にとっての有用植物が豊富な植相をなしています。植物の豊かな森には動物も多くの種が生息していました。縄文人はシカ・イノシシを中心に、それらの大小さまざまな動物を狩猟の対象としました。

動植物の豊かな森は土地を肥やし、また森を再生させました。縄文人は 八ヶ岳山麓の豊かな自然から食料や生活物資を得て暮らし、八ヶ岳の母な る森と大地から生活様式に根差した高い文化を築きました。



八ヶ岳西南麓 (車山高原 ビーナスラインより撮影)

2 山麓に放射状に広がる長峰状台地

八ヶ岳の西麓は、山腹から山麓末端に向かって縦方向に流れる谷で分断され、東西に長い長峰状のなだらかな台地が並列する、山麓特有の地形となっています。台地と台地の間は深い谷地形となり、沖積作用が進んで湿地帯となった谷は縄文人の水場環境でした。縄文中期の集落は、こうした台地上部の広く平坦な地形の場所に営まれています。

縄文人の集落は、谷で分断された長峰状の台地を生活領域の単位としていたと考えられています。集落が同じ台地上に営まれる場合は一定の距離を置き、近接する場合は谷を挟んで別の台地に営まれました。こうした台地の広がる山麓上部の「原」は、狩猟や生活物資を調達する共同の資源地区として運用されていたとみられています。

近年、ほ場整備が進んで山麓の地形環境はだいぶ変わりましたが、八ヶ岳山麓には縄文人が集落を営み、社会的関係を結ぶ基礎をなしたとみられる、山麓特有の地形がまだ残されています。

3 霧ヶ峰・冷山の黒曜石原産地

北八ヶ岳から霧ケ峰にかけての一帯は、縄文人が道具を作るために必要とした黒曜石の原産地です。日本列島中央部での黒曜石の原産地はこの一帯が最大規模であり、和田峠、霧ケ峰に原産地を抱える諏訪郡下諏訪町と小県郡長和町では、縄文時代の黒曜石鉱山の研究に取り組んでいます。

北八ヶ岳の冷山も黒曜石原産地です。冷山西斜面の標高1,800m付近には黒曜石の大露頭があります。冷山直下の渋川遺跡の発掘調査により、 渋川遺跡では旧石器時代に冷山の黒曜石を用いた、石器製作の行われてい

たことが判明しました。続く縄文時代に おいても冷山の黒曜石が利用されていた ことも判明しています。

しかしながら原産地も含め、冷山の黒曜石はまだ多くが謎に包まれています。 霧ケ峰、冷山の黒曜石は、この地の豊かな自然が与えた特産物であり、それらの原産地は縄文人にとって「宝の山」でした。



冷山黒曜石原産地 大露頭

第3節 縄文遺跡の宝庫

1 中期主体で全時期の遺跡が存在

茅野市の遺跡は、平成21年現在で347か所が登録されています。このうち縄文時代の遺跡は237か所です。縄文時代の遺跡数を時期別にみると、1つの遺跡が複数期にわたる例もありますが、草創期6、早期61、前期86、中期172、後期67、晩期22、不明35か所です。中期の遺跡が全体の約73%で縄文遺跡の主体をなすものの、縄文時代のすべての時期の遺跡があります。

これらの遺跡は、市内の西端に近い沖積平地に立地する標高769mの家下遺跡から、八ヶ岳山中にある標高1,800mの冷山の黒曜石原産地遺跡まで、市内のほぼ全域で所在が確認されています。なかでも縄文文化が最も発達した中期の遺跡が多いのは八ヶ岳山麓と霧ヶ峰南麓です。

八ヶ岳山麓は中期の遺跡が多いものの、それと前後する時期の遺跡は、 山麓の周囲に位置する霧ヶ峰南麓や山麓先端部の宮川水系などにより多く 存在しています。

八ヶ岳山麓を中心に繁栄した世界に誇る縄文中期文化、その繁栄の歴史を、縄文時代の全時期にわたって存在する市内の遺跡をたどることで明らかにすることができる可能性があります。

2 黒曜石原産地のふもとの遺跡

市内で縄文遺跡が多いエリアは八ヶ岳山麓と霧ヶ峰南麓です。霧ヶ峰南麓は、霧ヶ峰の黒曜石原産地の直下に位置しています。また、八ヶ岳山麓も霧ヶ峰南麓に続く地域であり、かつ、冷山の黒曜石原産地の直下にあたります。両原産地の黒曜石は旧石器時代から利用が進み、霧ヶ峰の原産地は縄文時代に至って黒曜石鉱山として開発され、黒曜石利用が盛んに行われました。国史跡駒形遺跡に象徴される霧ヶ峰南麓の遺跡は、この黒曜石の搬出、石器製作、供給の拠点で広域的な縄文ネットワーク、黒曜石交易を行っていたとみられています。

冷山黒曜石原産地の実態はまだ明らかではありませんが、八ヶ岳山麓は霧ヶ峰南麓に続く地域であり、今後、和田峠、霧ケ峰と冷山原産地との関係を調べていかなくてはなりません。

いずれにしても、茅野市域は、縄文時代の社会と深く関わった黒曜石の原産地であり、黒曜石交易の拠点となった地域と考えられます。

3 芸術的評価の高い縄文土器の出土地

縄文文化はそれぞれの地域や時期によって多様で特徴的な土器文化を発達させました。特に中期には、八ヶ岳山麓を中心とした中部高地に芸術的評価の高い様式の縄文土器が発達しました。

土器は縄文人が生活のために必要とした生活用 具です。食料の煮炊きに用いた深鉢が多く、その ほか、食料貯蔵用の大形の深鉢、盛付け用の浅鉢、 ランプとした吊手土器、醸造具や太鼓とした説の ある有孔鍔付土器など様々な形態があります。

縄文人はこれら様々な土器に日常生活に直接必要のない把手や文様を施しました。把手には蛇を象ったものや顔面把手と呼ばれる把手には精霊のように姿・かたちのないものを形に表し



蛇体把手付土器 (尖石遺跡出土)

たり呪術者を表現したといわれるものもあります。文様には人体や動物を 想わせるものがあり、全体として物語性のある文様が構成された土器もあ ります。

こうしたことから、土器の文様には単なる装飾ではなく意味がある、縄 文人の精神性や信仰観が表われていると考える人もいます。いずれにしろ、 日常生活の器とした土器の造形には、縄文人の高い文化がうかがわれます。 市内の縄文中期の遺跡からはこうした土器が多く出土しています。

第4節 縄文文化の象徴と考古学者の名誉市民

文化財保護法では、史跡名勝天然記念物の指定について、「文部科学大臣は、記念物のうち重要なものを史跡に指定することができ、そのうち特に重要なものを特別史跡に指定することができる。」としています。そして、その指定基準に、史跡は「(略) 我が国の歴史の正しい理解のために欠くことができず、かつ、その遺跡の規模、遺構、出土遺物等において学術上価値あるもの」とし、特別史跡については「史跡のうち学術上の価値が特に高く、わが国文化の象徴たるもの」としています。

現在、全国にある縄文時代の遺跡数は34,675か所です。(註1)この

うち史跡は142件、うち特別史跡は3件です。(註2)

茅野市では、尖石遺跡が昭和27年に縄文時代の特別史跡としてはわが 国最初の指定を受けています。また、上之段遺跡は昭和17年、駒形遺跡 は平成10年に国の史跡に指定されています。

国宝・重要文化財の指定については、「文部科学大臣は、有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定することができる」とし、「重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいない国民の宝たるものを国宝に指定することができる」としています。

国宝に指定されている考古資料のうち縄文時代の指定物件は5件、重要文化財の指定物件は92件です。(註3)「土偶」(縄文のビーナス)は平成7年の国宝指定であり、これは縄文時代の考古資料としてはわが国最初の国宝指定でした。

また、国内最大級の完形の「土偶」(仮面の女神)は、その素晴らしい造形美のため、平成26年8月に国宝に指定されました。これには中ッ原遺跡出土の浅鉢形土器等8点が附(つけ)たり指定されています。

また、考古学者を名誉市民として顕彰している自治体は茅野市を含めて 全国に6自治体あります。どなたも考古学研究の進展に大きな功績のあっ た研究者ですが、縄文時代の遺跡の研究に功績の認められたことで名誉市

民の称号を贈られたのは、茅野市の名誉市民宮坂 英弌 (みやさか ふさかず) 先生です。

宮坂英弌先生は昭和5年から尖石遺跡の発掘を始められ、困難な社会情勢下でも地道な調査を続けられました。尖石遺跡の国史跡指定後、与助尾根遺跡の発掘に取り組み、日本における最初の縄文時代の村の全面発掘を行うなど縄文時代の集落研究に輝かしい業績を残されましたが、戦後の苦しい経済状態の中で続けられた発掘は困難を伴うものでした。そこで、茅野市は宮坂先生の情熱と業績に対し、昭和42年に名誉市民の第1号とし



て表彰し、平成11年には「宮坂英弌記念尖石縄文文化賞」を制定して功 績を顕彰しています。

宮坂先生の発掘のきっかけは、諏訪地方を代表する俳人の小平雪人との子弟関係にありました。小平は兄の影響で考古学にも秀でていました。当時、宮坂先生は泉野小学校の教師でした。宮坂先生がその後も尖石遺跡の発掘研究に打ち込めたのは、校長や同僚教師達の理解と協力が大きかったといわれています。

また、宮坂先生は多くの協力者に支えられました。宮坂先生が居住した南大塩区を中心とする豊平地区の人々、宮坂先生の教え子など泉野地区の

人々にも支えられて尖石遺跡の研究を深められました。もちろん、ご家族 が最大の理解者であり、協力者でした。

宮坂先生ご自身もそうであったように、宮坂先生を支えた多くの人々は、 茅野の人、教育、学問を大切に考える風土と歴史が育てた人々です。それ らの多くの人々に支えられ、宮坂先生は考古学者として大きな功績を残さ れました。

わが国文化の基層をなすとともに、象徴でもある縄文時代の特別史跡と 史跡が存在し、また、たぐいない国民の宝たるものとしての縄文時代の2 体の国宝土偶を有し、さらには縄文時代の研究者を名誉市民にいただく自 治体は他に例がありません。この点に茅野市のアイデンティティー(註4)、 個性が表れていると言えます。

- 註1 国立奈良文化財研究所の公開データベースによる。
- 註2 文化庁の国指定文化財等データベースによる。
- 註3 註2に同じ。
- 註4 自己同一性、自分が自分であることの認識。存在意義、独自性、帰属意識などとも言い換えられる。自分らしさ、原点といった意味で使われることもある。

第5節 縄文文化から根付いた茅野市のアイデンティティー

1 施設の整備と活動

茅野市の縄文文化に関する研究と普及活動は、明治時代以来、この地の 先覚者達によって営々と積み重ねられてきた歴史があります。

その1つの節目は、昭和29年に豊平村(当時)が建設に着手した尖石 考古館の開館です。豊平村はこれに先立ち、昭和25年に与助尾根遺跡の 敷地を買収し、遺跡保存に力を入れてきました。戦後の不安定な社会情勢 の下で、豊平村が尖石遺跡を保存し、尖石考古館の建設を目指したことに、 私たち茅野市民は大きな意義を認めます。南大塩区に建設された考古館は、 新しい日本の社会に向けて考古学と文化の情報を発信し、社会の建設に大 きく貢献しました。ここに、現在の茅野市のアイデンティティーが根を張 ったと言えるのではないかと考えます。

考古館はその後、昭和54年に現在地に移りました。平成7年6月の「土偶」(縄文のビーナス)の国宝指定を契機に、新尖石縄文考古館が平成12年に開館し、様々な活動を展開しています。小・中学校の社会科授業での

利用、学芸員による学校支援活動、市民によるボランティア・サークル活動、年間約4万人の入館者等、考古館利用の形態は様々です。さらに、尖石遺跡や中ッ原縄文公園が整備され、八ヶ岳総合博物館、神長官守矢史料館などの博物館施設も整い、歴史や文化についての生涯学習、ひとづくりを進めています。

このように、考古館や縄文遺跡が整備され、社会教育、生涯学習を推進してきたのは、宮坂英弌先生をはじめ茅野市の多くの先人達の努力の賜物です。また、歴史や文化に理解をもつ市民一人ひとりの「心」が背景とな

って、こうした教育環境が 整えられてきました。

茅野市は、これまで、多 くの先人達によって進めら れてきた縄文文化に関する 研究や普及活動の歴史の上 に立ち、これをさらに発展 させ、縄文文化によるまち づくり、ひとづくりを進め ていきます。



茅野市尖石縄文考古館

2 縄文文化からの発信

生涯学習の推進を通して、市民の心の中に、縄文文化の繁栄した土地で 暮らせる、茅野市を誇りに思う気持ちが育まれてきました。

そうした市民の思いは、これまでに宮坂英弌先生の名誉市民顕彰、市民憲章前文での縄文文化に関わる文言の採用、豊平小学校正面玄関への尖石遺跡出土土器のモニュメント設置、市道北大塩丸山線(ふるさとグリーンライン)法面擁壁への縄文土器のレリーフと橋梁親柱への縄文のビーナス像の設置、市道南大塩線起点への「縄文文化の道」碑の設置、宮坂英弌記念尖石縄文文化賞の制定、市広報等での縄文のビーナスと仮面の女神のイメージキャラクターの使用、市長名刺への縄文のビーナスと仮面の女神のデザイン採用、等々の形となって表れました。市民の中に「縄文」は茅野市の誇り、アイデンティティーであるという意識が徐々に形成されてきています。

また、「茅野市 5 0 0 0 年尖石縄文まつり」(実行委員会主催)、「八ヶ岳縄文の里マラソン大会」(茅野市主催)等のイベントが行われるようになり、市民生活の中に縄文を意識したイベントが溶け込み、縄文文化を核とする新たな茅野市の個性が形成されつつあります。

第4章 「縄文」の価値をいかしたまちづくりの戦略

―「縄文」が輝かせる3つの柱―

第1節 「縄文」の価値

平成12年7月20日、茅野市5000年祭のスタートに当たり、「『縄文王国』茅野 5020年へのメッセージ」と題して、5000年祭記念タイムカプセルに、次の内容の「未来への伝言」を収めました。

「縄文王国」茅野 5020年へのメッセージ

私たちは、今、新世紀への扉を開こうとしています。そして、この扉の向こうには、私たちが、これまで経験したことのない変革と創造の世界が広がっているものと思います。「縄文王国」茅野5020年、そして西暦2020年の茅野市民の皆さん、私たちの未知の世界のなかに、あなたがたがいます。

私たちは、遥かな未知の世界に踏み出そうとする時、過去を振り返り、 先人たちの知恵と歴史とに学びます。私たちのこのメッセージが、皆さ んにとって、過去から未来へと向かう道標となることを願っています。

今から5000年前、「縄文王国」のキャッチフレーズのとおり、この地に縄文文化が花開きました。縄文時代中期、八ヶ岳西南麓一帯では多くの人々が、豊かで活力に満ちた生活を営んでいました。市内には、この時代を代表する「特別史跡尖石遺跡」、「史跡上之段遺跡」、「史跡駒間跡」など200か所以上もの遺跡が発見されています。また、土偶「縄文のビーナス」は、「縄文時代の精神文化を考えるうえで傑出した文化遺産」と評価され、平成7年、日本最古の国宝に指定されています。近年、豊かな森の文化として発達した縄文文化の復権と見直しが進んでいます。人と自然との共生が大きな課題である現代において、森や川を大切にし、大地の恵みに感謝して暮らした縄文人に学ぶことは、私たちの将来にとって極めて大事なことだと思います。

20年後の茅野市は、どんな姿をしているのでしょうか。茅野市は今、

○長期10か年計画のなかで、将来像を「八ヶ岳の自然と共生し、躍動する る交流拠点都市」として、まちづくりを進めています。そして、この「尖る 石」では、茅野市の文化的ルーツとして、日本の縄文文化のメッカである るという誇りにかけて、縄文の森再生をめざした尖石史跡公園整備や、 縁としての尖石縄文考古館建設等を進めてきました。

今年は新しい千年紀の幕開けの年であるとともに、20世紀から21世紀への架け橋の年です。この歴史的ターニングポイントの年に、茅野市5000年祭として、尖石縄文考古館のオープニングフェスティバルを市民総参加で開催いたします。市民の教育・文化活動への参加、関心への良い機会とするとともに、「尖石」の輝かしい歴史を、全国にアピールしていきたいと思っています。

今、本市は、「たくましく、やさしいまちづくり」という基本的な考え方に立って、市民・民間と行政とは対等であるというパートナーシップのまちづくりを先進的に進めています。 20年後の皆さんにとっては、パートナーシップのまちづくりということは、当たり前のことになるでしょう。私たちもまた、そのことが当たり前となる時代を築いていこうと考えています。

私たちの未来には、幾多の課題が横たわっていると思います。私たち は、その課題に向け、21世紀の扉を開き、皆さんが暮らす輝かしい未 来に向け、力強く歩み出していこうとしています。この茅野市が進めて いる新しいまちづくりを、未来へのメッセージとして残していきたいと 考えています。

このメッセージに込められているように、私たちのこれからの生き方を「縄文」は教えてくれています。「過去から学び、今日を生きる者は、未来に希望を持つ。」と言われますが、歴史に学び、今を知ることは、未来へのステップとなります。

私たちのふるさと、茅野は、縄文文化という輝かしい歴史を有しています。先人たちは、これまでこの地で八ヶ岳の自然や風土、歴史を背景に日々の営みを続け、個性豊かな地域文化やその生活様式を創り出してきました。

そのルーツとなる縄文時代は豊かな森に恵まれ、私たちの祖先は、森がもたらす自然の恵みに日々感謝して暮らし、そして、自然のなかで持続的な発展を遂げてきました。今こそ、私たちは、この縄文文化から学ばなければならないことがあると思います。国宝「土偶」(縄文のビーナス)や「土偶」(仮面の女神)に私たちが感動するのは、その造形美もさることながら、

土偶に込められた縄文人の祈りや想いに対し、そこに時代を超えて共通する人間の精神の普遍性を見るからだと考えます。

現在の私たちは、豊かな生活や消費を追求するあまり、結果としてそれぞれが何らかの形で未来に残すべき自然環境を損なってきたことを素直に反省しなければならないと思います。そして改めて私たちは未来に向けて、ライフスタイルの見直しや、環境に対する意識を問い、自然と共生した環境未来都市を築いていくことが大切なことだと考えます。

私たちは、未来の世代に対し、この「縄文文化」を通して普遍的な価値 や、大切に守らなければならないものを伝えていくべき責務があります。

第2節 「縄文」の価値をいかしたまちづくりの方針

市民プランでは、茅野市の目指す将来像である「人も自然も元気で豊か躍動する高原都市」を包括的・分野横断的に貫くキーワードとして、「ひとの輝き」、「みどりの輝き」、「まちの輝き」を掲げています。

縄文プロジェクトでは、「縄文」を切り口に、「ひとが輝く『縄文』」、「みどりが輝く『縄文』」、「まちが輝く『縄文』」の3つの柱により、市民プランの将来像の実現を目指します。

この縄文プロジェクトの推進に当たっては行政や市民はそれぞれの役割を担います。

行政は市民に対し、茅野市の縄文文化の啓発を図るとともにそのための環境整備を行います。また、様々な機会を通じて茅野市の縄文のまちづくりを内外へ発信し、茅野市の統一的なイメージアップを図ります。

一方、市民は、茅野市の縄文文化を学び、知ることで、私たちの現在の 生活を見直す機会としていきます。

市民総参加による縄文プロジェクトの取組を通して、市民一人ひとりが、世界に誇る縄文文化と、それを育てた豊かな自然の中で生活していることに自覚や誇りを持てるまちづくりを進めます。

第3節 ひとが輝く「縄文」

1 取組方針

縄文人は、約1万年にもわたり安定した平和な社会を築いてきました。 その背景にある縄文人の「生命」を大切にする考え方、ものの「共有」、「絆」 を大切にする縄文人の生き方に、「自助」、「共助」の考え方を学ぶことがで きます。

今、茅野市では様々な分野でひとづくりの取組をしています。ここでは そうした取組の1つとして、茅野市の縄文文化を世界に発信していく、そ の基礎となる取組を行います。

子どもから大人まですべての市民が、自分たちの住んでいるこの地に、 国の象徴的な文化財が多数存在している事実を知ること、そしてその文化 財の価値や意義を正しく理解することは、茅野市の縄文文化を世界に発信 する基礎となると考えます。

縄文文化が日本の基層文化として脈々と世代間を通して継承されたように、私たちは、ひとづくりを通して縄文文化の価値を子どもたちへ、未来へと伝えていきます。

「識る」、「広める」、「産み出す」、「楽しむ」、「守る」の5つの視点で「ひとが輝く『縄文』」に取り組んでいきます。

第4節 みどりが輝く「縄文」

1 取組方針

縄文文化は豊かな自然のなかで繁栄しました。この縄文文化を育てた八ヶ岳の豊かな自然と環境を守り、育て、「自然が元気で豊か」なまちづくりを進めます。

また、自然から与えられた恵みを大切にする、縄文人の思想や生活に学び、資源を大切にする取組を進めます。さらに、地球温暖化防止に向け、自然エネルギーを取り入れた自然や環境に優しい、循環型のまちづくりを行います。

「識る」、「広める」、「産み出す」、「楽しむ」、「守る」の5つの視点で「みどりが輝く『縄文』」に取り組んでいき、「環境未来都市」の実現を目指します。

第5節 まちが輝く「縄文」

1 取組方針

縄文文化の繁栄したこの地の風土をいかして発展してきた伝統文化に触れることや、地場産品の提供などは、「縄文」の世界に浸ることのできるまちづくりの基礎となります。

また、縄文文化の繁栄を産み出した豊かな大地・水・光・空気などの清らかな自然とともに生きる暮らしを大切にし、田舎暮らし、体験生活を柱としたエコツーリズムなどの産業振興に力を入れていきます。

自然食品による縄文食の開発、四季の美しい変化に富んだ清涼な高原、 豊富な温泉、清らかな空気と水をいかした健康をテーマとする観光への取 組も、まちの輝きに大きな可能性があります。

縄文人が暮らした自然豊かな環境をいかし、「識る」、「広める」、「産み出す」、「楽しむ」、「守る」の5つの視点で、「まちが輝く『縄文』」に取り組んでいきます。



冬の風物詩 寒天作り

第2編 推進計画

第2編では、構想を実現していくための具体的な取組を示します。

市の取組のみならず、多くの市民や民間団体などが「縄文」を意識し、発信することにより、地域の愛着や地域の発展につなげていくことが、縄文プロジェクトです。

第1章 推進にあたって

第1節 推進計画のめざす姿

優れた縄文文化の精神を取り入れ、いかし、継承するまちづくりは、市民の一人ひとりがまちづくりに対する喜びと、郷土に対する誇りと愛着を持つこと、そして健康でいきいきと暮らし、人と人とがつながり、それぞれの人生が豊かになるという、ひとづくりの取組でもあります。ひとが育ち、まちづくりが進むことで、よりよい地域社会を構築していくものです。

また、「縄文」をいかしたまちづくりを進めることで、世界が注目する縄文文化を育てた茅野市の個性が形成されていきます。地球にやさしく、人にやさしく、世界の平和につながる精神をもつ縄文文化の現代的意義に学び、市民生活にいかそうとするまちづくりは、地球環境の回復や人類繁栄への課題解決につながっていきます。日本の縄文文化に未来の人類社会の可能性を見出そうとする今日の世界に、「縄文」をいかした茅野市のまちづくりは、多くのメッセージを発信することができます。

第2節 3つの柱と5つの視点

「ひとが輝く縄文」、「みどりが輝く縄文」、「まちが輝く縄文」を、「縄文」の価値をいかすまちづくりの3つの柱とします。この3つの柱を「縄文」を識(し)る、「縄文」を広める、「縄文」から産み出す、「縄文」を楽しむ、「縄文」を守る、の5つの視点でそれぞれ展開していきます。

· 市民総学芸員化の更なる推進(ガイドブックの作成) 2-1-2-(4) 縄文を感じられる公共施設などの空間(環境)づくり 2-3-2-(3) 縄文総合芸術祭の開催(縄文月間における各ジャンルでの取 5つの視点全てに関連する新たな取組 組 (アカデミック、生活、芸術、スポーツ、祭)) 2-4-2-(1)・縄文アートプロジェクトによる実演芸術の上演 2-4-2-(2)・世界文化遺産登録に向けた取組(組織の設立) 2-6-(1) 竪穴住居での体験宿泊(つくる・宿泊・食事) 2-1-2-(1) ・縄文の里史跡整備と活用事業の推進 2-5-2-(1) ・国史跡の学術調査と保存管理計画の策定 2-5-2-(2) ・市民参加による埋蔵文化財の発掘と保存 2-5-2-(3) ・尖石縄文考古館の周辺整備(竪穴住居) 2-2-2-(2)・縄文広場の開設 2-2-2-(3)・写真、本、映像、メディアの活用 2-2-2-(4) 縄文の日の制定と、イベントの実施 2-4-2-(3) · 尖石縄文考古館の整備と充実 2-1-2-(2) ・縄文科の取組(副読本の作成) 2-1-2-(3) 縄文専用ホームページの開設 2-2-2-(1) 新たな取組 ・縄文に学んだ商品の開発 2-3-2-(1)・縄文に学んだ事業の開発 2-3-2-(2) 画 人々が集い、楽しみ、親しみ、地域への 八ヶ岳を中心とする豊かな自然・風景を ~ 縄文時代から育まれた自然環境や ~ 縄文を通じた芸術やお祭りなどにより ~ 縄文時代の遺跡や縄文時代からの 現代社会の課題の解決につなげる ~ 縄文文化遺産、縄文人が選んだ 縄文の価値を国内外に向けて 後世に継承し、茅野市の宝を守る 豊かな土地を産業に活かす ~ 潚 ~ 縄文人の生き方を識り 愛着心を醸成する ~ 強力に発信する ~ 華み出す 万める NO 41 離 灃 퐾 測 41 贬 羅 6 B 6 6 堰 品 S 縄文プロジェクト 体系図 舞 相心

第2章 市民総参加による「縄文」のまちづくり

―構想を力強く推進するための取組―

※「これから新たに取り組んでいくこと」の「実施時期」は、その取組を実施する時期の見込みを「短期 $(1\sim3$ 年の間)」、「中期 $(4\sim5$ 年の間)」、「長期 (それ 以上)」で表わしてあります。

第1節 「縄文」を識る

縄文人の生き方を識り、現代社会の課題の解決につなげます。

1 これまでに取り組んできたこと

- (1)縄文検定の実施
 - ①市民総学芸員化に向け、初級、中級、上級の縄文検定の実施
- (2)縄文に関する講座・講演会の開催
 - ①「縄文」に関する市民向け講座等(考古館・公民館)
 - ②考古学研究者を招いた縄文ゼミナール
- (3)学校における縄文の学習
 - ①小・中学生を対象とした縄文体験学習への支援(総合学習の時間に おける土器づくり、クラブ活動への支援等)

2 これから新たに取り組んでいくこと

- (1)竪穴住居での体験宿泊(つくる・宿泊・食事)
 - ①実施主体 市及び民間
 - ②実施時期 短期~長期
 - ③目指す姿 縄文時代の衣・食・住が体験できる竪穴住居を設置し、 利用者に応じたプログラムにより、縄文時代の生活が体験でき、生きる力を学べる場所をつくります。

- (2) 尖石縄文考古館の整備と充実
 - ①実施主体 市
 - ②実施時期 短期~長期
 - ③目指す姿 子どもから大人まで楽しく学ぶことができる資料の展示 や、学習できるスペースを充実し、食事もとれるような 施設を整備します。
- (3)縄文科の取組(副読本の作成)
 - ①実施主体 市
 - ②実施時期 実施中
 - ③目指す姿 八ヶ岳西麓に生きた縄文人の精神性に触れながら、自分 たちの今と将来を見つめ直し、豊かな人生を希求する「生き方学習」と、ふるさとの文化に誇りをもち、広く日本 各地・世界各地の文化を尊重できるようになる「ふるさと学習」を展開します。また、子どもたちに向け、分かりやすい副読本を作成します。
- (4) 市民総学芸員化の更なる推進 (ガイドブックの作成)
 - ①実施主体 市
 - ②実施時期 短期~長期
 - ③目指す姿 市民一人一人が市内にある縄文遺産やそれらが持つ文化 財の価値を理解し、茅野市の宝として説明できるよう、 子どもから大人までが縄文について楽しく学べるガイド ブックを作成し、市民の更なる総学芸員化に取り組みま す。

第2節 「縄文」を広める

縄文の価値を国内外に向けて強力に発信します。

- 1 これまでに取り組んできたこと
 - (1) 学術的・文化的見地での「縄文」の発信
 - ①大英博物館土偶展への出展

- ②尖石縄文文化賞による縄文文化研究の顕彰
- ③他の自治体との連携・協働による縄文文化の発信
- ④行政視察における縄文の発信
- (2)縄文ふるさと大使による「縄文」PR活動
 - ①歴史、文化、芸術、自然、特産品等」の普及広報活動
- (3)市民による「縄文」に関連した活動
 - ①市内小学生が描いた「縄文のビーナス」の駅前地下駐車場への展示
 - ②エコツーリズム協議会「歴史文化委員会」における縄文文化・歴史 の伝承
 - ③縄文のふるさととしての自然や文化の魅力を活用した田舎暮らしの 推進
 - ④縄文ふるさと応援団による情報発信
 - ⑤消費生活展での「縄文」に関わる展示コーナーの設置
 - ⑥市民の森での縄文文化の伝承活動
 - ⑦茅野八ヶ岳そば振興会議による縄文文化が栄えた八ヶ岳西麓地域産 のそばの振興
- (4)イベント・講座等の開催
 - ①尖石縄文まつり
 - ②八ヶ岳縄文の里マラソン大会
 - ③縄文文化に関する企画展
 - ④縄文文化大学講座
 - ⑤縄文教室
 - ⑥縄文ゼミナール
 - ⑦縄文文化写生大会
 - ⑧関連自治体との黒曜石フォーラム
- (5) グッズ・キャラクター・キャッチフレーズ等の活用
 - ①縄文に関するキャッチフレーズの統一化
 - ②縄文キャラクターデザインと名称の統一化
 - ③市民や民間企業等におけるキャラクター活用の推進
 - ④縄文のビーナスの切手の発行
 - ⑤福祉バス「ビーナちゃんバス」へのキャラクター使用
 - ⑥ピンバッジの作成と販売
 - ⑦各種印刷物、出版物への縄文キャラクター等の使用

- (6)「縄文」を関連付けた観光振興
 - ①「縄文のビーナス」「仮面の女神」を掲載した観光パンフレットの作成と活用
 - ②尖石縄文考古館の見学と縄文人体験を取り入れた学習旅行(サマーキャンプ・スノーキャンプ)の誘致
 - ③縄文エリア(八ヶ岳、蓼科、白樺湖、車山、縄文の里)周遊イベント
 - ④縄文散策コースの調査及び研究
 - ⑤縄文を意識した観光看板の設置
- (7)「縄文」を取り入れた環境整備
 - ①上下水道整備における縄文イメージの取入れ
 - ②縄文と連動した都市・河川・環境づくり
 - ③地球温暖化対策実行計画の実践

2 これから新たに取り組んでいくこと

- (1)縄文専用ホームページの開設
 - ①実施主体 市及び民間
 - ②実施時期 短期
 - ③目指す姿 縄文専用ホームページを開設し、茅野市の縄文やまちづくりを広く積極的に発信します。
- (2) 尖石縄文考古館の周辺整備 (竪穴住居)
 - ①実施主体 市及び民間
 - ②実施時期 短期~長期
 - ③目指す姿 尖石縄文考古館の周辺で縄文時代を体感でき、市民の方 や観光で訪れた方に楽しんでもらえるような場所を整備 します。
- (3)縄文広場の開設
 - ①実施主体 市及び民間
 - ②実施時期 短期~長期
 - ③目指す姿 茅野駅周辺に、楽しみながら縄文を体感してもらえるような広場を開設します。
- (4)写真、本、映像、メディアの活用

- ①実施主体 市及び民間
- ②実施時期 短期
- ③目指す姿 茅野市にある縄文遺産などを写真、本、映像を使って伝えることや、メディアを活用し全国に発信します。

第3節 「縄文」から産み出す

縄文時代から育まれた自然環境や縄文文化遺産、縄文人が選んだ豊かな 土地を産業に活かします。

1 これまでに取り組んできたこと

- (1)縄文と連動した産業の振興
 - ①縄文の里「茅野八ヶ岳そば」産地づくり
 - ②縄文関連グッズの公募、販売
 - ③土産品等の認定による販売促進
 - ④デザインテープ、デザインシールの製作
- (2)縄文関連商品の開発
 - ①なんでもあいキャッチ (壁掛け)
 - ②縄文仮面の女神ノベルティグッズ (ストラップ)
 - ③縄文のビーナスと仮面の女神のキーホルダーとコースター
 - ④縄文のビーナスと仮面の女神などのジグソーパズル
 - ⑤縄文のビーナスをかたどりしたクルミ菓子
 - ⑥ペットキャリーハウス
 - ⑦JOMON MEBIUS (リング)

2 これから新たに取り組んでいくこと

- (1)縄文に学んだ商品の開発
 - ①実施主体 市及び民間
 - ②実施時期 実施中
 - ③目指す姿 食・お土産品・雑貨などにおいて、消費者が縄文を感じられるような商品(縄文文化に関連した商品や、縄文デ

ザインブックを活用した商品) が多く開発されます。

- (2)縄文に学んだ事業の開発
 - ①実施主体 市及び民間
 - ②実施時期 実施中
 - ③目指す姿 縄文時代から続く自然豊かな土地を守り、その自然の四季折々の移り変わりやその季節ならではのものを活かした事業を開発します。
- (3)縄文を感じられる公共施設等の空間(環境)づくり
 - ①実施主体 市及び民間
 - ②実施時期 実施中
 - ③目指す姿 市庁舎、茅野駅をはじめ公共施設などで、縄文文化の栄 えたまちであると感じられるような空間(環境)をつく ります。

第4節 「縄文」を楽しむ

縄文を通じた芸術やお祭りなどにより、人々が集い、楽しみ、親しみ、 地域への愛着心を醸成します。

1 これまでに取り組んできたこと

- (1) 学校や保育園で楽しむ取組
 - ①縄文体験学習の充実(縄文体験宿泊学習、火おこし等)
 - ②縄文学習の支援と発表会の開催 (発掘体験、土器や石器の製作等)
 - ③食育での縄文食体験
 - ④縄文文化副読本や縄文絵本の作成と活用
- (2)仲間や親子で楽しむ取組
 - ①親子自然学習会での縄文体験(弓矢づくり、土器づくり等)
 - ②尖石史跡周辺の散策路の利活用とウォーキング・ウォーキングラリーコースの設定
- (3) みんなで楽しむ取組

- ①尖石縄文まつり
- ②八ヶ岳縄文の里マラソン大会
- ③縄文文化写生大会

2 これから新たに取り組んでいくこと

- (1)縄文総合芸術祭の開催(縄文月間における各ジャンルでの取組(アカデミック、生活、芸術、スポーツ、祭))
 - ①実施主体 民間
 - ②実施時期 短期
 - ③目指す姿 縄文月間の既存の取組を継続するとともに、縄文を基礎 とした芸術文化、生活文化、スポーツ文化などの各分野 を併せた総合的な芸術祭を開催します。
- (2)縄文アートプロジェクトによる実演芸術の上演
 - ①実施主体 民間
 - ②実施時期 短期
 - ③目指す姿 縄文人の生き方を学ぶ物語を市民の手で作り上げ、その 作品を通じて現代社会の中で縄文文化を改めて見つめな おす機会とします。
- (3)縄文の日の制定とイベントの実施
 - ①実施主体 市及び民間
 - ②実施時期 短期
 - ③目指す姿 全国に共通するような「縄文の日」を制定し、縄文文化 や縄文遺跡など縄文に関することを改めて学ぶ日として、 全国に発信します。

第5節 「縄文」を守る

縄文時代の遺跡や縄文時代からの八ヶ岳を中心とする豊かな自然・風景を後世に継承し、茅野市の宝を守ります。

1 これまでに取り組んできたこと

- (1) 史跡及び周辺の整備
 - ①尖石縄文考古館の整備
 - ②国特別史跡尖石遺跡の保存計画策定と史跡整備
 - ③史跡周辺地の活用と整備
- (2)縄文遺跡の保護
 - ①公共、民間事業に伴う縄文遺跡の発掘調査
- (3)縄文に関する資料の整備
 - ①宮坂英弌氏の発掘資料ほか、市内遺跡出土の考古資料の整理

2 これから新たに取り組んでいくこと

- (1)縄文の里史跡整備と活用事業の推進
 - ①実施主体 市
 - ②実施時期 実施中
 - ③目指す姿 国特別史跡尖石遺跡、史跡上之段遺跡、史跡駒形遺跡などをつなぎ、八ヶ岳西山麓の遺跡を巡ることで、縄文時代を体感できるような整備をし、活用していきます。
- (2) 国史跡の学術調査と保存管理計画の策定
 - ①実施主体 市
 - ②実施時期 実施中
 - ③目指す姿 国特別史跡尖石遺跡、史跡上之段遺跡、史跡駒形遺跡の 学術調査を推進し、その成果に基づく史跡の保護・保存 を行い、活用を図ります。
- (3) 市民参加による埋蔵文化財の発掘と保存
 - ①実施主体 市
 - ②実施時期 短期
 - ③目指す姿 市民参加型の発掘調査等を行い、縄文の里茅野、地域の 歴史に対して広く知っていただき、考古学への興味を持 つ市民を育てます。

第6節 5つの視点全てに関連する新たな取組

- (1)世界文化遺産登録に向けた取組(組織の設立)
 - ①実施主体 市及び民間
 - ②実施時期 短期~長期
 - ③目指す姿 世界文化遺産登録に関する先進地の研究や、県内や近隣 県の自治体と連携した組織の検討などを行い、市民と一緒になって世界文化遺産登録に向けて盛り上がれる活動 を展開します。

第3章 縄文プロジェクトの展開のために

第1節 新たな取組の展開

第2編の推進計画で、これから新たに取り組んでいくことを位置付けま した。

この取組には、行政のみで取り組むのではなく、市民の方と協働して取り組んでいくことが、縄文プロジェクトの展開する上で重要なポイントになります。

そのため、(仮称)縄文プロジェクト実行市民会議を組織し、今まで当市 が取り組んできたパートナーシップの手法を用いてそれぞれの取組を展開 していきます。

第2節 (仮称)縄文プロジェクト実行市民会議

(1)役割

第2編の推進計画に位置付けた、これから新たに取り組んでいくことをどのように展開していくか、また、これまでに取り組んできたことの見直しを検討し、実践します。

(2)部会の設置

第2編の第2章で縄文プロジェクトを推進するための視点を、「縄文」を識る、「縄文」を広める、「縄文」から産み出す、「縄文」を楽しむ、「縄文」を守るの5つとし、その視点ごとにこれから新たに取り組んでいくことと、これまでに取り組んできたことを整理しました。この視点ごとに部会を設け、それぞれの取組を検討します。

なお、5つの視点全てに共通する取組である、世界文化遺産登録に向けた取組(組織の設立)は、5つの視点とは別の部会を設けます。

第3節 展開にあたって

茅野市民プラン(第4次茅野市総合計画後期計画)では、縄文プロジェクトを行政組織の枠組みを超えて、包括的・横断的に取り組んでいく重点プロジェクトとして位置付けています。

縄文プロジェクトの取組は特定の分野に限らず、複数の分野にまたがって展開する必要があり、ソフト事業とハード事業を一体的な連携のもとに実行していくこととなります。

特にソフト事業にあっては、それぞれの部会で、福祉、環境、教育、国際化などを意識して、それらの分野に事業の展開によって得られる効果が広がるよう取り組むことが必要です。

一「縄文物語」—

【はるか昔の物語】

そこには澄んだ空気があった、青い空と白い雲、天に向かって大きく伸びる木々には豊かな果実が実っていた。そして、その地には何故か、人を惹きつける神秘的な力が溢れていた。

今から5000年前、この地は、日本の縄文文化の中心地だった。

この地の自然界すべてに精霊が宿り、人々は自然界と共に暮らしていた。 小川のせせらぎが、飛んできたアオサギに、話しかける。……………………………。

ムラの外れには、ひと際大きな老樹がそびえていた。樹は、幾多の冬を越 し、そして春、夏、秋と季節を重ね、あたかも死と再生を繰り返すかのよう に年輪を刻んできた。

樹の太い幹の横に一人の老人が寄り添っていた。老人はその大樹の横に座り、樹と昔話をするのが好きだった。大樹から、老人の知らない、ずっと、ずっと昔の話を聞くのが好きだった。

こんなふうに……………

けれども、これは別の物語。それぞれに、それぞれの縄文の物語がある。 それは、いつかまた、別のときに話すことにしよう。

【物語のはじまり】

今から5000年前、この地は、日本の縄文文化の中心地だった。

JR茅野駅に降りると爽やかな風が吹いていた。駅東口の展望台からは八ヶ岳の嶺々が広がっている。茅野から見る八ヶ岳連峰が一番美しい。駅前には、……………。

資料編

縄文時代Q&A

- 【Q1】 縄文時代とは、どういう特徴の時代であったのか。世界の他の国々と比較して、世界のどういう時代に相当するのか。
 - [A1] 今からおよそ5,000年前、お隣の中国では黄河流域に稲作を行う新石器時代がはじまり、遠くエジプトでは牧畜や農耕による都市国家から、上下に統一された初期のエジプト王朝が始まります。同じ頃、日本のほぼ中央、八ヶ岳山麓では縄文のビーナスに代表されるような縄文時代中期の文化が大きく花開きます。
- 【Q2】 縄文時代の気候・自然(動物・植物などの生物)にはどういう特徴があったのか。植生と地形との間にどのような特徴的な傾向があったのか。
 - [A2] 縄文時代中期、縄文海進で知られる前期のやや暖かな気候の時期を終え、現在とほぼ同じような気候にあったと考えられます。この地域の山々もクリやナラなどの雑木林が広がり、多くのシカやイノシシなどが生息していたと考えられています。
- 【Q3】 縄文時代の生活実態はどうなっていたのか。衣食住にはどんな特徴があったのか。
 - [A3] 縄文時代は、各地の発掘調査で様々な植物が栽培されていたことが確認・報告されてきてはいますが、主たる食料とはなりえず、 狩猟と採集の時代であったとする見解が一般的です。

縄文土器には敷物の痕跡のほか、布の痕跡が残っているものがあります。このことからも縄文人が布を用いた衣服をまとっていたことが推測されます。実物の出土がなく、描かれたものがないので、そのデザインまでははっきりとしません。しかし少なくとも、かつての漫画に描かれたような(実際には旧石器時代をイメ

ージしていたが)、毛皮だけをまとっている姿は払拭すべきでしょう。 もちろん、冬季には狩猟で得た動物の毛皮は利用されていたと思われます。

住居は一般には地面を掘りくぼめて床面に柱の穴を設け、柱を建てて屋根を掛ける竪穴住居が用いられましたが、平地式の住居や高床式の建物も発見されています。屋根は与助尾根遺跡の復元家屋のように茅で葺いたものが想像されてきましたが、各地の発掘調査の成果により、木の皮を葺き、その上に土を被せた土屋根構造の住居を復元している遺跡も出てきました。少なくとも、火災にあった平安時代の住居から炭化した茅が出てきているので、それがいつの時代までさかのぼることができるのか、今後の発掘調査の成果にかかっています。

- 【Q4】 縄文人の社会はどんな仕組みになっていたのか。家族はどのように 形成されていたのか。家族・家族群と集落形成にどんな関連があった のか。
 - [A4] 集落を構成する単位である住居には、現代の家族と同じように 両親や子どもといった4人から5人が生活していたと考えられ ています。日本海側の新潟県から東北地方にかけては、普通の住居址の他に大形の住居址が発見されることがあります。出土品が 特に優れていたり多かったりということはなさそうなので、集落 の長の住居というようなものではないだろうかと考えられています。

また、住居内には炉が何か所かあることから、若者が集団で生活する場、あるいは冬の作業小屋のようなものもあったのではないかと考えられています。

- 【Q5】 八ヶ岳山麓になぜ縄文時代の住居跡等、縄文遺跡群が多数存在した のか。発達した最大の理由は何か。どのような要素が多数の人々を住 まわせたのか。
 - [A5] 狭い日本列島とはいえ、南北に長い島国は様々な地域で気候や 風土が異なりますが、それを巧みに利用し、お互いに交流をもち、 影響を与えながら各地で特色ある文化を創造してきました。例え ば、海沿いの海岸に面した所では魚介類を多量に採取していたこ

とが貝塚により明らかですし、北日本などでは定期的に大群が押し寄せるサケやニシンなどの捕獲を行っています。こうした地域では安定した食糧の確保が可能であることから、より集落の構成員が多くても養える環境があったと考えられます。

一方、八ヶ岳山麓の集落は、尖石遺跡などの数百軒の住居址が確認されている遺跡でも、中期という千年の間に建てたり壊したりを繰り返す中での数であるため、同時に存在した住居は数軒、多くても十数軒であろうと思われます。限られた山麓の自然の恵みを分かち合うことができるように集団関係を発達させ、豊かに暮らして行けるような地域社会をつくっていたと考えられます。また、縄文人にとって大切な石材である黒曜石の原産地であることも、遺跡が多数営まれた要因であったと考えられます。

- 【Q6】 なぜ、土器に美しい造形美や芸術性が表現されているのか。
 - [A 6] 縄文土器は主に食料の煮炊きに用いられましたが、粘土の可塑 性により煮炊きには不必要なほどの美しい装飾が施されている ことが、機能重視となる後の容器と大きく異なる点です。一見独 創的な形や装飾のようにも見られますが、こうした装飾は時期や 地域により特徴があり、そのルールに則って製作されています。 縄文土器には幾何学的な文様や抽象的な文様が描かれることが ほとんどで、日常の生活を描いたような具象的な文様は見られま せん。それにもかかわらず数十キロ、あるいは百キロ以上も離れ た遺跡から同じモデルを見ながら製作したのではないかと思わ れるそっくりな縄文土器が出土することがあります。これなどは 文様の一つ一つに意味があり、縄文人がその思いを表現する、文 字の代わりとなっているのかもしれません。我々が「へのへのも へじ」と唱えながら絵を描くと、誰もが同じような絵を描けるの と同じように。それぞれの文様の意味については研究者により 様々な解釈が可能であり、推測の域を出ませんが、「自分たちの 先祖はどの山を越え、谷を越えてこの地にたどり着いた」という 叙事詩的な意味が込められているのかもしれません。あるいはシ カやイノシシなどがたくさん捕れるように、木の実がいっぱい採 取できるようにと祈りを込めているのかもしれません。
- 【Q7】 土偶が造られた理由は何か。なぜ、造形的、神秘的な美しい土偶が

造られたのか。

[A7] 縄文土器や石器が日常の生活に直接関わる道具なのに対し、土偶は精神生活に関わるものとして第二の道具といわれることがあります。そのほとんどが女性像であり、妊娠している姿を現していることから安産のお守りではないかと考える説もあります。全国で1万5,000点とも言われていますが、各住居に必ずあるというものではないため、妊娠した女性が個人的に持つものではなく、集団の祭祀に用いられたと考えられています。大きさも様々で、大形のものほど完全に近い形で遺存するのが多いのは、集団のシンボルとして何回も祭祀に用いられるよう、特に精密に製作されたためだと思われます。

その代表が「縄文のビーナス」であり「仮面の女神」です。似た土偶は各地に散見されますが、大きさといい完成度といい、これらに勝るものは見受けられません。茅野市を中心とする八ヶ岳山麓が文化の発信地であったことがこのことによっても理解されるところです。

世界的に見ると、女性像は農耕社会において地母神とされていることから、縄文時代に広く農耕が行われていたと主張する研究者もいます。

- 【Q8】 土偶「縄文のビーナス」が国宝指定を受けた最大の理由は何か。他 の土偶との最大の違いは何か。
 - [A8] 全国で約1万5,000点ともいわれる土偶が出土しています。これらのほとんどは壊されていますが、「縄文のビーナス」は完全な形で埋められたもので、高さ27cmの大形という点でも希少です。多くの土偶が土器などと同様に廃棄され、破片となって遺跡内で散在して発見されるのに対し、「縄文のビーナス」は縄文中期の集落の中央部の穴に埋められた状態で出土しています。このように、土偶の出土状態が発掘調査で確認された例も少なく、縄文中期の人々の思惟を探る上に貴重な資料です。

こうした考古学的な見地だけではなく、大地にどっしりと自立する妊婦を現す造形美は、縄文人の豊饒(ほうじょう)への願いを現しており、「縄文のビーナス」の名にふさわしい、縄文美術の最高傑作といえるでしょう。

- 【Q9】 土偶「仮面の女神」が国宝指定を受けた最大の理由は何か。他の土 偶との最大の違いは何か。
 - [A9] 土偶「仮面の女神」は、集団墓地のひとつの墓に、①右脚をわざと壊す、②空洞の腹部に何か詰め物をする、③胴体の割れ口に破片を蓋のようにはめ込む、④墓のなかに小さいくぼみを作って横向けに置く、⑤壊した右脚をもとの位置に安置する、という手順を踏んで埋納されたことがわかりました。お墓に埋納された土偶そのものがとても少ないことに加えて、ここまで埋納の手順がわかっているのは「仮面の女神」だけであり、国宝指定の最大の理由です。逆三角形に大きく表現された仮面は、当時の巫女が祭祀を司った際に仮面を装着した姿と思われます。

そのような学術的な価値の高さだけでなく、「縄文のビーナス」同様に完全な状態に復元できる資料であったこと、高さ 34cm という大きさ、そして複雑な模様を丁寧に丹精込めて施されていて、数ある土偶のなかでも美術品としての価値がとても高いことも大きな理由だと言えます。

- 【Q10】 縄文時代の土偶は形・大きさ・文様などでタイプ分けがいくつくらいにできるのか。
 - [A10] 土偶は縄文時代の早期から晩期まで約8千年にわたって作られました。作られる時期、地域により形は様々ですが、早期から前期までは概して顔面表現もなく、造形的にも簡略で小形のものが多いのです。中期以降になると東日本を中心に数多く作られ、大きさは10cm前後のものが中心となりますが、まれに「縄文のビーナス」のような大形のものがあります。中部高地の土偶は自立し、豊饒(ほうじょう)を現す妊娠女性を表現する場合が多くあります。後期では頭部・顔面の形から山形土偶、ハート形土偶と呼ばれる土偶があり、晩期では遮光器土偶が著名です。
- 【Q11】 縄文時代の土器は何に使われたのか。
 - [A11] 縄文土器は約1万3,000年前から作られはじめました。 用途は主に食料の煮炊きです。器種は深鉢が代表的ですが、中期

に入ると器種は増え、煮炊きのほか祭祀に用いたと考えられる釣 手形土器や有孔鍔付土器なども見られます。

- 【Q12】 縄文時代の土器は形・大きさ・機能などにより何タイプに分類できるか。
 - [A12] 縄文土器は約1万年の長きにわたって使われました。土器は時期や用途により形は様々ですが、大別すると深鉢、浅鉢、壺、注口土器などがあります。高さ20~30㎝前後のものが一般的ですが、50㎝を越える大形のものや、10㎝以下の小形のものもあります。
- 【Q13】 縄文時代の土器の文様は何種類くらいに分類できるか。
 - [A13] 縄文土器の文様は様々で、時期や地域を現す重要な要素でもあります。縄文時代という時代名称が示すように、縄を回転させて文様とする縄文文様は縄文土器の代表例です。この他にも鉛筆状の細い棒に刻みを入れて回転させた文様(押型文)もあります。特に中期の中部高地の土器には、貼り付けた粘土紐にヘラ等の工具で沈線等を組み合わせた、複雑で抽象的な文様も見られます。また、新潟県信濃川流域を中心に分布する火焔土器と呼ばれる、力強い隆帯表現や把手を持つ造形的に優れた土器も縄文土器の特徴です。
- 【Q14】 外国人や外国の考古学者が今や「縄文」を高く評価する理由は何か。
 - [A14] 縄文文化は約1万3,000年前から2,300年前まで、約1万年にわたり、自然と共生・調和しながら高い文化を維持し続けた世界史的にもまれな文化です。このような自然と共存する社会の仕組みやその精神性は、西欧の新石器時代には見られない、日本列島独特の文化として注目されています。

また、縄文土器の造形から、20世紀以降西欧で注目されたプリミティヴ芸術(アフリカやオセアニアの部族美術)への関心なども無縁ではないと思われます。

茅野市縄文プロジェクト推進市民会議委員名簿

1 委員

※敬称略

1	女只				\•\ A\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
	氏	名		分科会	部会
朝	倉 寿	美	子	文化	広める
葦	木	美	咲	文化	産み出す
岩	崎	和	子	文化	楽しむ
鵜	飼	幸	雄	文化	識る
小	笠 原	弘	三	産業	楽しむ
岡	野	勇	<u>-</u>	文化	広める
荻	原	勝	彦	産業	広める
小	П	晋	平	文化	識る
北	沢千	登	勢	文化	識る
関	塚	正	嗣	文化	識る
玉	上	敏	男	産業	楽しむ
田	村	満	理	文化	識る
鶴	石	悠	紀	産業	楽しむ
樋	П	敏	之	産業	広める
宮	坂	貞	博	産業	産み出す
宮	坂	敏	郎	産業	楽しむ
両	角	和	哉	産業	産み出す
柳	沢	圭	_	産業	産み出す
柳	沢と	: よ	子	産業	産み出す
柳	平千	一代	-	座長	

2 オブザーバー

	氏	名		役 職 等	備考
立	石	良	忠	副市長	
牛	Щ	英	彦	教育長	
樋	П	尚	宏	企画総務部長	
五.	味	_	喜	産業経済部長	
小	池	沖	麿	生涯学習部長	H26.3.31 まで
木	Ш	亮	_	生涯学習部長	H26.4.1 から

3 事務局

	氏	名		役 職 等	備考
木	Ш	亮	_	秘書広報課長	H26.3.31まで
加	賀	美	積	秘書広報課長	H26.4.1 から
小	島	吉	彦	広報広聴係長	
宮	坂ラ	卡 沙	希	広報広聴係主事	H26.4.1 から
小	Ä	也	徹	企画課長	H26.3.31まで
小	平	雅	文	企画係長	
島	<u> </u>	直	樹	企画係主事	H26.3.31まで
土	橋	新	_	情報化推進係	H26.4.1 から
五	味	正	忠	商工課長	
鷹	野	鉄	也	産業振興係長	H26.4.1 から
上	田	佳	秋	茅野・産業プラザ担当	
田	中	友	里	産業振興係主事	
玉	枝	俊		観光課長	H26.4.1 から
小	池	俊	正	観光係長	H26.4.1 から
平	出	信	次	生涯学習課長	
藤	森		隆	教育総務係長	
守	矢	昌	文	文化財課長	
小	林	深	志	文化財係長	
小	池	岳	史	考古館係長	H26.4.1 から
功	刀		司	尖石史跡整備担当	H26.4.1 から
柿	澤	圭	_	まちづくり戦略室長	H26.4.1 から
牛	Щ		浩	まちづくり戦略室次長	
原	田	和	樹	まちづくり戦略室主査	H26.4.1 から
山	本	征	幸	まちづくり戦略室主査	H26.4.1から
三	井 潤		潤	まちづくり戦略室主査	H26.4.1 から

縄文プロジェクト推進市民会議の開催経過

平成 25 年 7 月 18 日	縄文プロジェクト推進市民会議準備会
平成 25 年 8 月 26 日	第1回縄文プロジェクト推進市民会議
平成 25 年 10 月 4 日	第2回縄文プロジェクト推進市民会議
平成 25 年 11 月 8 日	第3回縄文プロジェクト推進市民会議
平成 25 年 12 月 11 日	第4回縄文プロジェクト推進市民会議
平成 26 年 1 月 28 日	第5回縄文プロジェクト推進市民会議
平成 26 年 2 月 20 日	第6回縄文プロジェクト推進市民会議
平成 26 年 4 月 28 日	第7回縄文プロジェクト推進市民会議
平成 26 年 7 月 31 日	第8回縄文プロジェクト推進市民会議
平成 26 年 9 月 1 日	第9回縄文プロジェクト推進市民会議
平成 26 年 10 月 3 日	第10回縄文プロジェクト推進市民会議



みんなでつくる みんなの茅野市

- 発行 -

茅野市・縄文プロジェクト推進市民会議

- 問い合わせ先 -

茅野市企画総務部まちづくり戦略室

〒391-8501 長野県茅野市塚原2丁目6番1号 茅野市役所

TEL:0266-72-2101(内 273) FAX:0266-72-9040

Mail: senryaku@city.chino.lg.jp

茅野市尖石縄文考古館

〒391-0213 長野県茅野市豊平 4734-132

TEL: 0266-76-2270 FAX: 0266-76-2700

Mail: togariishi. m@city. chino. lg. jp

URL: http://www.city.chino.lg.jp/togariishi